

『 On-line みんなで法華経を学ぼう! 』 vol.22

Jan. 2024

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra” .

(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

『妙法蓮華経 如来寿量品第十六 (後半)』 (本門・正宗分)

○ 『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん

者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○ 『其の習学せざる者は、これを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○ 「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

(『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』 (法師品 二〇九頁 三行))

○ 『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得

たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○ 『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行/P5・1行)

※表記 例：(P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)

<如来寿量品 (前半) の復習>

・如来寿量品の二つの要点 (P170・4行/P120・終行)

第一の要点は、「仏の本体」をはじめて明らかに、その寿命が「不生不滅」とであると説く。

第二の要点は、「釈迦牟尼如来」が、「なぜ、入滅されなければならないか？」を、はっきり説明。

如来寿量品の三つの意味 (P13・1行/P9・1行)

『如来寿量品』には、三つの大切な意味があるとされています。その三つとは、

【開近顕遠(かいこんけんのん)】— 《近きを開き、遠きを顕わす》

釈尊の悟りを通して、永遠の過去からある「法」を知ること。(近くの事実から見て、一番遠くにあるものを顕わす。)

【開迹顕本(かいしやくけんほん)】— 《迹(あと)を開き、本(もと)を顕わす》

迹仏を通して本仏を知ること。

【開権顕実(かいこんけんじつ)】— 《権(ごん)を開き、実(じつ)を顕わす》

「方便」を通して「真理・真実」を知ること。(権(ごん)を通して実(じつ)を知ること)

・現実の相の違い

(P34・2行/P23・4行)

差別相というものは決して固定したものではなく、つねに流動しているものだということがわかってきます。すなわち縁起によって如何ようにも変わってしまうこともありうるのです。

・一念三千は中道観の極致

(P36・3行/P23・終4行)

平等相・差別相の両面から見るのではなく、それはどうにでも流動できるものであるという見方をしなければなりません。これが、お釈迦さまの中道観の極致であると、私は信じています。平等相に偏せず、差別相に偏せず、しかもその中間の立場をとるというのではなく、〈無限の流動の可能性のなかでこそ真実がある〉という、ものの見方があります。

・「現われる」とは「自覚」すること

(新しい解釈 P349・終6行)

もともとちゃんと存在するものを「自覚」ということを「現われる」といったまでにすぎません。～(本仏は)すべての人間を生かしている力である限り、我々の内側にも常に存在するものでありますから、我々が何らかの方法でその存在を自覚できないはずはないのです。その自覚が、とりもなおさず「仏」をみだてまつることです。

『汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし～世尊唯願わくは之を説きたまえ。我等當に佛の語を信受したてまつるべし』(二七頁 一行～終四行)

・智・慈・行がそろわなければならない

(P53・終3行/P37・3行)

「文殊菩薩」…智慧(智) 序品～安樂行品(迹門)

「弥勒菩薩」…慈悲(慈) 從地涌出品～妙莊嚴王本事品(本門)

「普賢菩薩」…実践(行) 普賢菩薩勸発品(本門)

人間が正しい、良い人間になるには、何よりもまず「智慧」が必要です。～「智慧」が身に付くと、智慧がまだ身についていない人を見ると、どうしても智慧を身につけるように救ってあげずにはいられない気持ちになります。すなわち「慈悲」の心が湧いてくるのです。「慈悲の心」が湧いて来れば、おのずからそれを「行為・実践」に現わさずにはおれなくなります。こうして「智慧・慈悲・実践」の三つがそろって完全に行われるようになった時、「仏の教え」は完成したことになります。

ほとけ さんじん さんじんいつたい
仏の三身 — 三身一体

(P66・1行/P45・終3行)

「法身・ほうしん」… 真如そのもの。ギリギリの根源の法。仏の本体。

「報身・ほうしん」… 真理・根源の法を具体化する人格的な力。阿彌陀如来など。

「応身・おんじん」… 実際に人間としてこの世に出現した仏。お釈迦さま。

これらの仏は考えの上で三つに分けられる形であり、本当は一体のものなのです。

『我實に成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由他劫なり』(二七三頁 一行)

『是れより來、我常に此の娑婆世界に在って説法教化す。亦餘處の百千萬億那由他阿僧祇の國に於ても衆生を導利す』(二七四頁 一行)

・絶対的存在

(P82・終3行/P58・終7行)

仏さまはまさしく絶対的存在なのです。～(しかに偉いや、莫大なお金など)それらは、いつかは滅し、散じてしまうものなのです。これらは真に我々が頼りにし、依り所にする事ができるものではありません。～無限であり絶対であればこそ、全身全霊を投げ出して信じ、頼りにし、お任せすることができるのです。このことを、しっかりとわきまえていなければなりません。

・本尊の確立

(P86・終4行/P61・4行 法華經の新しい解釈P372・終2行)

そのもとをたずねれば、すべて「久遠実成の本仏釈迦牟尼如来」に帰一するのだということが、ここではっきりしたわけです。そして、我々の信仰の対象となる本尊が確立することになります。

『我佛眼を以て其の信等の諸根の利鈍を觀じて、度すべき所に隨つて、～』 (二七四頁 五行)

『衆生の小法を樂える徳薄垢重の者を見ては、～』 (二七四頁 終四行)

・煩惱は垢である

(P107・終5行/P78・5行)

垢とは「煩惱」をさします。すなわち、「煩惱」は決して人間の「本質」ではなく、その表面についた「附着物」なのです。

『然るに我實に成佛してより已來、久遠なること斯くの若し』 (二七四頁 終三行)

『如来の演ぶる所の經典は、～ 或は己身を説き、或は他身を説き、或は己身を示し、或は他身を示し、或は己事を示し、或は他事を示す。諸の言説する所は皆實にして虚しからず』 (二七四頁 終行)

・六或示現

(P110・終2行/P79・2行)

「己身を説く」— 本仏(法身)について説く

「他身を説く」— その他の仏、燃燈仏、阿彌陀如来など(報身)について説く

「己身を示し」— 釈尊(応身)の身として現れる

「他身を示し」— その他の聖人・賢人の身として現れる

「己事を示し」— 仏さまの大慈・大悲の救いがそのまま救いの形として現れる

「他事を示し」— 一見、仏さまの救いでないような形、苦・痛み・試練として現れる

・苦惱は向上への踏み台

(P115・1行/P81・終3行)

心の「悩みや苦しみ」は、人間らしい人間となるためのひとつの「踏み台」となるのであって、これも大いに歓迎すべきことだといわなければなりません。～我々の日常生活においては、「他事」の方が「己事」よりもむしろ多く経験することですから、それに処する心がけをしっかりと作っておくことが必要なのであります。

『如来は如實に三界の相を知見す。生死の若しは退、若しは出あることなく、亦在世及び滅度の者なし』

(二七五頁 三行)

『實に非ず、虚に非ず、如に非ず、異に非ず、三界の三界を見るが如くならず』 (二七五頁 五行)

「實に非ず 虚に非ず」とは— 「実」・物事が現実にそこにあると見ること。

「虚」— 物事がそこに無いと見ること。 (P128・1行/P91・1行)

「如に非ず 異に非ず」とは— 「如」・常住ということ。「異」・変化すること。 (P130・1行/P92・5行)

「三界の三界を見るが如くならず」とは— 「三界」・人間が住んでいる世界。

三界に住んでいる人間が、狭い心や濁った眼で、自分たちの住んでいる三界を見ているような見方と違って、如来は透徹した眼で、この世界の本当のすがたを見ている。 (P131・終5行/P93・4行)

『如来明かに見て錯謬あることなし。諸の衆生、種種の性・種種の欲・種種の行・種種の憶想・分別あるを以ての故に、諸の善根を生ぜしめんと欲して、～ 種種に法を説く。所作の佛事未だ曾て暫くも廢せず』 (二七五頁 六行)

『我成佛してより已來甚だ大いに久遠なり。壽命無量阿僧祇劫、常住にして滅せず』 (二七五頁 終四行)

『若し佛久しく世に住せば、薄徳の人は善根を種えず。貧窮下賤にして五欲に貪著し、憶想妄見の網の中に入りなん。～ 諸佛の出世には値遇すべきこと難し』 (二七六頁 一行)

・仏を見ざる者

(P172・4行/P122・2行)

徳の薄い人は、そういうお方(仏さま)のご在世に巡り合えても、その教えに触れることができません。
～「求める努力は、あくまでも人間自身がしなければならない」—— これがお釈迦さまのお教え下さった大眼目のひとつです。

・恋慕渴仰

(P176・終3行/P125・5行)

この世で仏さまにお会いするなど、並大抵のことではできません。

・良医治子の警え

(P182・6行/P129・5行)

『速かに苦惱を除いて復衆の患なげんと』 (二七七頁 終四行)

『此の子愍むべし』 (二七八頁 二行)

『常に悲愍を懐いて心遂に醒悟し』 (二七八頁 終三行)



《如来寿量品(後半)のあらすじ》

— 自我偈 —

【二七九頁 五行】世尊はこれまで説いてきた無生無滅の『仏の本体』の意味と、なぜ自分が『入滅をしなければならないのか』の理由をさらに述べるために、『偈・げ』を用いて説かれました。

【仏の存在が《久遠実成》であり、衆生を教化して続けている】 ——

【(偈)二七九頁 七行】『我佛を得てより來(このかた)經(へ)たる所の諸(もろもろ)の劫數(こっしゅ)無量百千萬億載阿僧祇(おくさいあそうぎ)なり』「私が仏の悟りを得てから今日(こんにち)までの期間は、無量百千万億載阿僧祇(さいあそうぎ)という無数の劫(こう)を重ねた永遠の年月を経(へ)ています。そして私は、片時(かたとき)も休むことなく、『常に』真実の教えを説き続け、無数億(むじゆおく)という無数の衆生を教化してきました。この教化をしてきた年月もまた、果てしない年月が経(た)っています。

【(偈)二七九頁 終四行】／『衆生を度せんが爲の故に方便して涅槃を現ず而(しか)も實(じつ)には滅度せず常に此(ここ)に住して法を説く』私は衆生を『真の救い』へと導くため、『方便』として、時には『滅度する』という手段を用いてきましたが、しかし実際はこの世から去ったではありません。私は常にこの娑婆世界に住して、皆さんに『法を説いて教化している』のです。私はいつも皆さんのそばで『神通力』を自由自在に駆使(くし)して導いているのです」

【《滅度》を示す理由】 ——

【(偈)二七九頁 終二行】『顛倒(てんどう)の衆生をして近しと雖(いえど)も而(しか)も見ざらしむ』「しかし、衆生は仏とは全く反対の見方・考え方を持つ顛倒(てんどう)の状態にいるために、近くにいる私のことが判らず、『仏の存在を知る』ことができません。仏の姿が見えないのです。ところが私の『滅度』を目(ま)の当たりにすると、人々は私の遺骨を祀(まつ)って供養するようになり、その時はじめて仏を心から慕(した)い求めるようになります。／『滅(ことごと)く皆恋慕(みなれんぼ)を懐(いだ)いて渴仰(かつごう)の心を生ず』喉(のど)の渴(かわ)きで苦しむ者が水を求めるように、『仏と、仏の教え』を心から求めるようになるのです」

【仏が現われる。仏が見える条件】 ——

【(偈)二八〇頁一行】「教えを求めずにはいられなくなった衆生が、 / (『①衆生既(すで)に信伏し ②質直にして意(こころ)柔順(にゅうなん)に ③一心に佛を見たてまつらんと欲して ④自ら身命を惜まず 時に我及び衆僧(しゅそう) 俱(とも)に靈鷲山に出(い)ず』) **①**仏の教えを求道(ぐどう)して深く信受(しんじゆ)し、**②**正直で素直で、とらわれのない心でいて、**③**心の底から仏を求め、仏と共にあることを自覚し、しかも、自分も仏のように成りたいと心から願い、**④**そのためには自分の命さえもいらないという真剣な心、小さな自我にとらわれない心境になったならば、**☆その時、私は眷属(けんぞく)弟子、家来(からい)の意味)を引き連れて、靈鷲山・娑婆世界に姿を現わします。つまり皆さんの前に『現われる』のです**」

【仏が「滅度」を示す理由を、再び説く】 ——

【(偈)二八〇頁二行】「そして私は皆さんに次のように語ります。 / (『常に此(こ)にあつて滅せず 方便力を以ての故に 滅不滅ありと現す』) 『私はいつも皆さんのそばにいて、入滅してこの世を去ってはいません。それは、**皆さんを教化する方便として、姿を消し、この世を去るという形をとるのです。そして再び身を現わすのです。** / (『餘國(よこく)に衆生の恭敬(くぎょう)し信樂(しんぎょう)する者あれば我復(われまた)彼(か)の中に於て 爲に無上の法を説く』) また娑婆世界以外の他の世界で、私を心から求める者がいるならば、私はそこにも現われて最高無上の法を説くのです』と語ります。しかし衆生はこのことが理解できないために、仏は『滅度した』、『この世から去ってしまった』と思っているのです」

【(偈)二八〇頁五行】(『我諸(われもろもろ)の衆生を見れば 苦海に没在(もつざい)せり』) 『仏の眼を以つて衆生を見ると、衆生は『**苦しみ**の海』に溺(おぼ)れて喘(あ)えいっているように見えます。そういう衆生を救うために私は『滅度』の形をとり、人々に仏の存在と仏の教えを『**求める心**』を起こさせ、教えを受け止めることができるように導くのです。私の神通力とは以上のようなものであって、 / (『阿僧祇劫(あそぎごう)に於て 常に靈鷲山 及び餘(よ)の諸(もろもろ)の住處(じゅうしょ)にあり』) 私は阿僧祇劫(あそぎごう)という長い間、**常に靈鷲山・娑婆世界、つまり皆さんのそばと、その他の世界の人々のそばにいて法を説き続けているのです**」

【「天人常住満」の安らかな世界になる娑婆世界を、衆生は『苦の世界』だと見る】 ——

【(偈)二八〇頁終五行】(『衆生劫盡(じゆうつ)きて 大火に焼かると見る時も 我が此の土は安穩にして 天人常に充滿せり』) 「衆生が現実の世を見ると、すでに世は終わりを告げ、苦しみ^(ごうか)の業火(ごうか)に^(じごく)焼け尽くされ、苦しい人生を送る世界のように見えます。つまり、『苦の人生』だと感じています。しかし、**私の教えに導かれれば、この娑婆世界は仏の世界になり、天人が常に充滿する世界になるのです。娑婆世界は、仏の教えによって仏の世界となります。この仏の世界は安らかで穩(おだ)やかです。すなわち安穩(あんのおん)で、美しい林や花園に包まれ、素晴らしい家や屋敷が設(しつ)えられ、多くの宝が実る宝樹(ほうじゆ)が連(つら)なり、豊かな果実がたわわに実(み)った満ち足りた世界で、人々は何の心配もなく楽しく生活している世界です。そして天人が天界の清らかな音色の太鼓を打ち鳴らし、妙なる音楽を奏(かな)で、 / (『曼陀羅華(まんだらけ)を雨(ふ)らして 佛及び大衆に散す』) 美しい曼陀羅華(まんだらけ)の花びらが**仏と人々に等しく雨のように降り注がれます**。仏の世界とは**仏と衆生が一体となり、得(え)も言われぬ美しい平和な世界**なのです」**

【(偈)二八〇頁終行】『我が浄土は毀(やぶ)れざるに而(しか)も衆(しゅ)は焼け盡きて憂怖(うふ)諸(もろもろ)の苦惱 是(かく)の如き悉(ことごと)く充滿せりと見る』「このように仏の眼から見た現実の世界は、じつは毀(こ)われも焼けもしないのですが、衆生の目から見ると現実の世界は、大火に焼き尽くされ、不足と不満、不安と恐怖、怒りと争い、憂いと悲しみが付きまとい、すべてが苦しみ、悲しみ、悩みでいっぱいになっているように『苦の世界』だと見えるのです。 / 『是(こ)の諸(もろもろ)の罪の衆生は悪業の因縁を以て阿僧祇劫(あそうぎこ)を過ぐれども三寶(さんぼう)の名(みな)を聞かず』そして衆生は智慧がないために善いことができず、その結果、悪い行いを積み重ねて行き、そのために阿僧祇劫(あそうぎこ)という計り知れない年月を過ぎてても、仏・法・僧の、『三宝・さんぼう』の縁に触れることができず、その名さえ耳にすることができません」

【『仏を見る』ことができる条件を、あらためて説く】 ——

【(偈)二八一頁三行】『①諸(もろもろ)の有(あら)ゆる功德を修し ②柔和質直(にゅうわしちじき)なる者は則(すなわ)ち皆我(みなわ)が身 此(こ)にあって法を説くと見る』「しかし、**①**世のため人のためになる様々な善い行いを実践し、**②**とらわれのない柔和な心で、正直で素直な心で精進している者は、すぐに私を見ることができ、仏が常に自分のそばにいて法を説いてることを自覚するのです。そのような人々に対して、 / 『或時(あるとき)は此の衆の爲(ため)に佛壽(ぶつじゅ)無量なりと説く久しくあつて乃(いま)し佛を見たてまつる者には爲(ため)に佛には値(あ)い難(がた)しと説く』 仏はある時、『仏の寿命は無量である』と説くことがあります。また、長い間、仏を見ることができなかつたにもかかわらずようやく『仏の存在』を知り、『仏を見る』ことができた人には、『仏に出遭(であ)うことは大変難しいことです。ですから、仏の存在を知り、仏を見ることができたのですから、一生懸命精進しなさい』と説くのです」

【仏の寿命が無量であることの理由】 ——

【(偈)二八一頁六行】『我が智力(ちりき)是(かく)の如し 慧光(えこう)照らすこと無量に壽命無数劫(むしゅこ)久しく業を修して得る所なり』「仏の智慧の力というものは以上のように大きいものです。その智慧の力が照らし出す世界は無数に及びます。また私の寿命というものも無量であり、それは長い間に善業を積んできた菩薩行実践の功德にほかなりません」

【仏の説示を疑ってはならない。仏の言葉はすべてが『真実』であるから】 ——

【(偈)二八一頁終六行】「皆さんは仏の智慧というものを具えているのですから、 / 『此(こ)に於て疑いを生ずることなかれ 當(まさ)に斷(だん)じて永く盡(つ)きしむべし 佛語は實にして虚しからず』 以上の『仏の真実』について疑いの心を持ってはなりません。疑いと迷いは永遠に断ち切ってください。なぜなら、仏の言葉は全てが真実であり、偽(いつわり)はないからです」

【仏が「滅度」を示す理由を、三度(たび)説く】 ——

【(偈)二八一頁終五行】「先の『良医治子(らいいじ)の譬え』のように正気を失った子どもたちに対して、父が方便を用いて実際には死んではいないのに、『死んだ』と告げたことを、嘘(うそ)を言ったとして咎(とが)めることはできません。仏の『滅度』は人を騙(だま)す虚妄(こもう・人をだますこと)で

はないのです。／『我も亦(また)爲(こ)れ世の父 諸(もろもろ)の苦患(くげん)を救う者なり』私は皆さんの父です。この娑婆世界全体の父であります。あらゆる悩み苦しみを救う者なのです。私はいつも皆さんのそばにいて苦しみを除こうとしているのですが、凡夫は煩惱にとらわれて正気を失い、智慧ある見方とは全く逆転して心が顛倒(てんどう)しているために、真実を見ることができていません。／『實には在(あ)れども而(しか)も滅すと言う』ですから私は、実際にはいつも皆さんのそばにいますのでけれども、時が来れば『仏の存在と教え』を求める心を人々に起こさせるために、『滅度する』と告げるのです」

【(偈)二八頁 終二行]「もし、いつでも仏に会うことができるのだということになれば、人々は仏の縁に触れることが貴重なことだとは思わず、そのため、仏の教えを求めることもなく、／『而(しか)も憍恣(きょうし)の心を生じ放逸(ほういつ)にして五欲に著(じゃく)し悪道の中に墮(お)ちなん』その結果、わがままな心を起こしてしまい、欲しいままに五欲にとらわれ、やりたい放題になって、結局は行き着くところ、地獄・餓鬼・畜生・修羅という『四悪趣(しあくしゆ)』の悪道の人生に転がり落ちて行くことになります」

【仏は常に衆生と共にいる。一切衆生を常に的確に教化している】 ——

【(偈)二八頁 一行]『我常に衆生の道(どう)を行じ道を行ぜざるを知って』「私は、皆さん一人ひとりの仏道精進の状況・程度というものを常に見抜いています。つまりこの人は仏道をどこまで実践していて、どこまで極めているか。反対にこの人は何が実践できていないのかという状況をつまびらかに見極めています。／『度すべき所に隨(したが)って爲(こ)に種々の法を説く』ですから、その人の状況・機根を見抜き、最も的確な現象を示して、最適な教化をするのです」

【(偈)二八頁 二行]『毎(つね)に自ら是(こ)の念を作(な)す 何を以てか衆生をして無上道に入り速(すみ)やかに佛身を成就することを得せしめんと』「私はいつもこのように思っています。『どのようにしたら、衆生が仏の道に入ることができるであろうか。そしてどのようにしたら、いち早く仏の境地に到達させることができるだろうか』と常にそれだけを念じ、願っているのです」

釈尊は、仏の深い『大慈悲』と一切衆生を救い切るという『仏の本願』である【一大真実】を説き明かされたのでした。



げんしょう じつざい み あやま
現象を実在と見る 誤り (P193・4行/P139・4行)

凡夫というものは様々な欠点を持っていますが、なかでも最大の欠点は「目に見えるものしか実在しないと思うこと」です。この誤りから全ての誤りが出発し、全ての不幸が展開していくのです。～ まわりに起こる色々な物事を、確かに実在するものだと見るために、それこ心をふりまわされて苦しむのです。

それで、仏さまは、この世のすべての現象は『因(ある原因)と縁(ある条件)が結びあって生じた仮のあらわれにすぎない』ことを教えられました。

《^{しゆい}愚惟のひととき ①》

「凡夫の最大の欠点は『目に見えるものしか実在しないと思うこと』です。この誤りから、全ての誤りが出発し、全ての不幸が展開していくのです」と庭野開祖は説きます。

— では、この「誤り」から脱するには、「どのようにすればよい」のでしょうか？
また、「どのような心構え」を持つことが大切なのでしょうか？ 考えてみましょう。

なぜ良薬を飲まないか ^{りょうやく} (P197・1行/P141・終5行)

(あさはかな人間のわかままです。まだ知恵のできあがっていない子どもが、父の厳しい教を嫌がるのと同じです)

五官の楽しみに溺(おほ)れている人間にとって、仏さまの戒めや教訓は窮屈(きゅうくつ)でたまらなく感じられ～ 人のために尽くす菩薩行などバカバカしいとしか考えられないからです。
～ そういう衆生に対して、仏さまは怒(おこ)りもされなければ、あきらめもされません。『此の子愍(あわれ)むべし』といっておられます。ここがありがたいところです。

《^{しゆい}愚惟のひととき ②》

「五官の楽しみに溺(おほ)れる人間は、仏さまの戒めや教訓を窮屈に感じ、菩薩行をバカバカしいと考える」「そういう衆生に対して仏さまは怒(おこ)りもされなければ、あきらめもされません。『此の子愍(あわれ)むべし』といっておられます。ここが有り難いところです」と庭野開祖は説きます。— では私は、「仏さまの教えや戒めを守ることを窮屈に感じ、菩薩行をバカバカしい」と思っていますか？ そして仏さまが『此の子愍(あわれ)むべし』といっておられることを、どのように受け止めますか？ 振り返ってみましょう。

^{じぎょう} ^{ひつよう} 自行の必要 (P198・8行/P142・終4行)

人間にとって、自分自身でものごとをすることが、何より大切です。ことに信仰は絶対にそうでなくてはなりません。～ あくまでも自分の心で真剣に道を求め、修行していかなければなりません。～ 自分で求め、自分でつかんで行ってこそ、本当に身に付くのです。

《^{しゆい}愚惟のひととき ③》

「自分自身ですることが、何より大切です。(信仰は) あくまでも自分の心で真剣に道を求め、修行していかなければなりません」と庭野開祖は説きます。— では私は「自分の心で真剣に仏さまの教えを求め、自ら実践しているか？」 振り返ってみましょう。

『^つ尋いで ^{すなわ}便ち ^{きた}來り ^{かえ}歸って ^{ことごと}咸く ^{これ}之に見え ^{まみ}しめんが ^{ごと}如し』 (二七八頁 終行)

そして子どもたちが治ると、それを見計ったように父は他国から帰ってきて、子どもたちの前に姿を見せたのです。

『^{われ またこ}我も亦爲れ世の父 ^{もろもろ くげん}諸の苦患を救う者なり～ ^{じつ あ しか めっ}實には在れども而も滅すと言う』

(二八一頁 終三行)

ふたたび ^{ほとけ}仏 ^みを見る (P199・終5行/P143・8行)

子どもがすっかり治ってしまったら、父が無事な姿を見せて帰ってきたということ、これがまたひじょうに意味深い教えです。～

我々が仏の教えを心から信仰すれば、ひとりでに仏さまが見えてくるのです。なにも、仏さまのお姿がみえてくるわけではありません。仏さまと共にあるということが、自覚されてくるのです。～

いったんは見失ったようでも、その教えを正しく信受すれば、仏さまはその瞬間に我々のところへ帰ってこられるのです。そして、真の親としていつまでも一緒に暮らし、我々を守ってくださるのです。この譬えには、このような、言うに言われぬ『慈悲の心』が満ち溢れていることを、よく感じ取らなければならないと思います。

《^{しゆい}愚惟のひととき ④》

子どもたちが薬を飲んで病が治ってしまうと、父が無事な姿を見せたことの意味を、「仏さまのお姿が見えてくるではありません。仏さまと共にあることが『自覚』されてくるのです」。しかも「教えを正しく信受すれば、仏さまはその瞬間に我々のところへ帰ってこられるのです」と庭野開祖は説きます。 — このことを、あなたはどのように感じますか。

『^{てんどう しゆじょう}顛倒の衆生をして ^{ちか いえど しか み}近しと雖も而も見ざらしむ』 (二七九頁 終二行)

《^{しゆい}愚惟のひととき ⑤》

『顛倒の衆生をして近しと雖も而も見ざらしむ』と釈尊は説き示され、「顛倒している(何事も仏の見方とは反対に損得、好き嫌いなどで判断し、自分中心で見ている)衆生は、本仏がいつも我々と一緒におられるのに、それを『見る』ことができない」と庭野開祖は説きます。 — 『仏を見ることができない』のは一体なぜなのでしょう。そして、そういう衆生が『仏を見る』、仏さまが『常にそばにいることを感じる』ためには、どうすれば良いのでしょうか？ ちょっと考えてみましょう。

^{しゆきょう きよくち}宗教の極致 (P207・3行/P149・終5行)

(自らのものの見方が) 顛倒(てんどう)であるということだけでも、しっかりと悟っていれば、相変わらず「目に見えるもの」のみを対象としていても、心は常に仏さまの方を向いています。

ですから行住坐臥(ぎょうじゅうざが)、仏さまの教えに基づいた行い、すなわち菩薩行を自然とするようになるのです。そしてそれが完全にできるようになった時、はじめて人間の『仏性』が燦然(さんぜん)として輝き出してくるのです。これが、『宗教の極致』といってもいいでしょう。

《息惺のひととき ⑥》

「顛倒している自分を自覚し、菩薩行を自然に行い、完全にできるようになった時、『仏性』が開顯する」と庭野開祖は説きます。 — 幸いにも私たちは菩薩行を実践できる自分に成ることができました。このことを踏まえて、庭野開祖が説く「菩薩行を完全にできるようになった時、はじめて人間の『仏性』が燦然(さんぜん)として輝き出してくる」ということを、かみ締めてみましょう。

『衆生既に信伏し 質直にして意柔輒に 一心に佛を見たてまつらんと欲して
自ら身命を惜まず 時に我及び衆僧 俱に靈鷲山に出ず』(二八〇頁 一行)

《息惺のひととき ⑦》

『衆生既に信伏し 質直にして意柔輒に 一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず 時に我及び衆僧 俱に靈鷲山に出ず』の經文を、どのように受け止めますか？ この經文を味わってみましょう。

『阿僧祇劫に於て 常に靈鷲山及び餘の諸の住處にあり』 (二八〇頁 終五行)

『衆生劫盡きて 大火に焼かるると見る時も 我が此の土は安穩にして 天人常に
充滿せり～ 曼陀羅華を雨らして 佛及び大衆に散ず』 (二八〇頁 終五行)

衆生は、この世は時代が終わり、大火に焼き尽くされる『苦の世界』だと見えるのですが、じつはこの世は仏の教えによって救われ、天人が充滿して、そればかりか曼陀羅華(まんだらけ)の花びらが仏および衆生に平等に降(ふ)り注(そ)がれているのです。

『我が浄土は毀れざるに 而も衆は焼け盡きて 憂怖諸の苦惱 是の如き 悉く
充滿せりと見る』 (二八〇頁 終行)

仏さまの目から見れば、この娑婆世界は仏の国土であるのにもかかわらず、自分の仏性をあらわすことができずに、迷いが覆(おお)い、仏性を隠(かく)している衆生から見ると、この世は、まさしく地獄の様相(ようそう)に見えるというのです。

《息惺のひととき ⑧》

なぜ、衆生は『我が浄土は毀れざるに 而も衆は焼け盡きて 憂怖諸の苦惱 是の如き悉く充滿せりと見る』のでしょうか？ 考えてみましょう。

『諸の有ゆる功德を修し 柔和質直なる者は 則ち皆我が身 此にあって法を説く
と見る』 (二八頁 三行)

世のため、人のためになる精進を修め、功德を積み、心が柔和で正直で素直な人は、すぐに私(仏)を見ることができるのです。

『佛語は實にして虚しからず』 (二八頁 終五行)

『我も亦爲れ世の父 諸の苦患を救う者なり 凡夫の顛倒せるを爲て 實には在れども而も滅すと言う』 (二八頁 終三行)

『我常に衆生の道を行じ 道を行ぜざるを知って 度すべき所に随つて爲に 種種の法を説く』 (二八頁 一行)

『毎に自ら是の念を作す 何を以てか衆生をして 無上道に入り 速かに佛身を成就することを得せしめんと』 (二八頁 二行)

この結びのお言葉こそ、仏さまの慈悲の極致であります。単にその場その場の苦しみを救おうというのではなく、こういう本質的な救いを実現しようというのが、仏さまの本願なのであります。

《急催のひととき ⑨》

『毎に自ら是の念を作す 何を以てか衆生をして 速かに佛身を成就することを得せしめんと』の経文をあなたはどのように受け止めますか？ 味わってみてください。

によらいじゆりようほん ほけきょう せいずい
如来寿量品は法華經の精髓 (P232・3行/P169・終2行)

如来寿量品によって、我々が知ることができたのは――

第一に、仏さまの本体は「**久遠実成の本仏** (宇宙の大生命)」であり、常にこの世に住していらっしゃる。

第二に、本仏は、我々といつかなる時でも共にいてくださり、常に我々を生かしてくださっている。

第三に、もともと仏と衆生は親子なのだから、我々もまた、「**永遠に生き通し**」なのであるということ。

以上のことを自覚し、しっかりと胸のなかに確立すれば、**我々の人生は実に明るい、不安のない、しかも勇気と積極性に溢れるものとなる**のです。

『如来寿量品』が『法華經』の精髓であり、**一切經の魂**であるとされているゆえんは、ここにあるのです。

《**愚^{ゆい}惟^{ゆい}のふいかえい まどめ**》

今日の『如来寿量品 第十六 (後半)』の学びを通して、何を学び取ったか？
(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) 振り返ってみましょう。

合 掌